

# 半七捕物帳

正雪の絵馬

岡本綺堂

青空文庫



これも明治三十年の秋と記憶している。十月はじめの日曜日の朝、わたしが例によつて半七老人を訪問すると、老人は六畳の座敷の縁側に近いところに坐つて、東京日日新聞を讀んでいた。老人は歴史小説が好きで、先月から連載中の塚原渋柿園氏作『由井正雪』を愛読しているというのである。半七老人のような人物が歴史小説の愛読者であるというのは、なんだか不似合いのようにも思われるが、その説明はこうであつた。

「わたくしは妙な人間で、江戸時代の若いときから寄席の落語や人情話よりも講釈の修羅場らばの方がおもしろいという質たちで、商売柄にも似合わないといふものに笑われたもんですよ。それですから、明治の此の頃流行の恋愛小説なんていうものは、何分わたくし共のお齒に合わないので、なるべく歴史小説をさがして讀むことにしています。渋柿園先生の書き方はなかなかむずかしいんですが、読みつづけているとどうにか判ります。殊に今度の小説は『由井正雪』で、わたくし共にもお馴染なじみの深いものですから、毎朝の楽しみにして讀んでいます」

それが口切りで、けさは由井正雪のうわさが出た。老人は商売柄だけに、丸橋忠弥の捕物の話などもよく知っていた。それから縁をひいて、老人は更にこんなことを云い出した。

「あの正雪の絵馬はどうになりましたかね」

「正雪の絵馬……。どこにあるんですか」

「堀ノ内のそばです」と、老人は説明した。「堀ノ内のお祖師様から西南に当りますかね。半里はんみちあまりも行つたところに和田村、そこに大宮八幡というのがあります。今はどうなつていいのか知りませんが、総門から中門までのあいだ一丁あまりは大きい松並木が続いて、すこぶる神さびたお社やしろでした。社内にも松杉がおい茂つていて、夏なんぞは蟬の音がそうぞうしい位です。場所が少し偏寄かたよつてるので、ふだんはあまり参詣もないようですが、九月十九日の大祭のときには近郷近在から参詣人が群集して、なかなか繁昌たけしたそうです。その社殿に一つの古い絵馬が懸けてありまして、絵馬は横幅が二尺四五寸、丈たけが一尺三四寸で、一羽の白い鷹をかき、そのそばに慶安二二と書いてあります。慶安二二は即ち慶安四年で、由井正雪、丸橋忠弥らが謀叛むほんの年です。あからさまに四年と書かずに、わざと二二と書いたのは、二二が四という洒落しゃれに過ぎないのか、それとも何かの意味があるのか、それはよく判りません。

第一この絵馬には奉納主ぬしの名が書いてないので、誰が納めたものか昔から判らなかつたんですが、その慶安四年から六七十年の後、享保年間に八代將軍が当社へ参詣なされたことがあるそうで、その時にこの絵馬を仰いで、これは正雪の自筆であるぞと云われた。將軍はどうして正雪の書画を知っていられたか知りませんが、その以来、この絵馬は由井正雪の奉納であるという事になったんだそうです。そう判つたらば、正雪は徳川家の謀叛人ですから、その奉納の絵馬などは早速取り捨ててしまいそんな筈ですが、その後もやはり其の儘に懸けられてあつたのを見ると、將軍が果たしてそんなことを云つたかどうか、ちつと怪しいようにも思われますが、ともかくも江戸時代には正雪の絵馬として名高いものでした。わたくしが見たのは江戸の末で、慶安当時から二百年も経っていましたから、自然に板の木目もくめが高く出て、すこぶる古雅に見えました。さてその絵馬について、こんなお話があるんですよ。

こんにちでも諸方の神社に絵馬が懸けてありますが、むかしは絵馬というものがたいへんに流行したもので、江戸じゆうに絵馬専門の絵馬屋という商売が幾軒もありまして、浅草茅町かやちようの日高屋などは最も旧家として知られていました。これからお話をいたすのは、四谷塩町しおちようの天津屋という絵馬屋の一件で、これも相当に古い店だということでした」

安政元年の春はとかくに不順の陽気で、正月が例外に暖かであったと思うと、三月には雷鳴がしばしば続いた。取り分けて三月二十六日の夜は大雷、その翌日の昼もまた大雷雨で、江戸市中の所々に落雷した。

「これじゃあ何処へも出られねえ」

きょう一日を降り籠められて、半七も唯ぼんやりと夕飯を食ってしまうと、暮れ六ツ半（午後七時）頃には雷雨も晴れて、月のない空に無数の星の光りがきらめき出した。これから何処へ出るというあてもないので、今夜は早寝かなどと云っていると、表の格子をあける音がきこえて、子分の亀吉が茶の間へ顔を出した。

「今晚は……」

「ひどく鳴ったな……」

「時候はずれでちつと嚇おどかされました」

「表からはいつて来て、誰か連れでもあるのか」と、半七は訊きいた。

「実はよんどころない人に頼まれて案内して来たんですが、親分、逢つてくれますかえ」  
「ここまで連れ込んでしまった以上は、逢うも逢わねえも云つちやあいられねえ。まあ、通してみろ」

亀吉に案内されて遠慮勝ちにはいつて来たのは、四谷の大木戸ぎわの油屋で、これも旧家として知られている丸多という店の番頭である。番頭といつても、まだ二十五六の痩せぎすの男で、わたしは幸八と申します、なにぶんお見識り置きくださいと丁寧に名乗った。丸多の名は半七もかねて知っているので、これも丁寧に挨拶した。

「掛け違つてお初にお目にかかりますが、おまえさんが丸多の番頭さんですかえ」

「番頭と申すのは名ばかりで、まだ昨日きのうきようの不束者ふつつかものでございます。この後も何分よろしく願います」と、幸八は繰り返して云つた。

その暗い顔色をみて、半七は何を頼みに来たのかと考えながら挨拶していると、亀吉が横合くちいから引き取つて啄くちを出した。

「番頭さんは口が重くつて話しにくいと云いますから、わっしから取り次いでも好ようがすかえ」

「誰からでもいい。用談の筋道を早く聞かして貰おうじゃあねえか」と、半七は云つた。

「実はね、親分。こういうわけですよ」と、亀吉はひと膝ゆすり出て説明した。「丸多の主人がちつと道楽をやり過ぎましてね」

「主人は幾つだ」

「主人は多左衛門といつて、ことし四十六だそうですね」

「四十六……」と、半七は笑った。「それじゃあ真逆まさかに近所の新宿へ熱くなったというわけでもあるめえ。一体どんな道楽が過ぎたのだ」

亀吉の説明によると、その道楽は絵馬の蒐しゅう集しゅうであった。前にも云う通り、江戸時代には絵馬が流行はやった。したがって、古い絵馬や珍らしい絵馬をあつめることを一種の趣味とする人々も少なくなかった。時には同好者が会合して、めいめいの所蔵品を見せ合うこともあつた。そうになると、そのあいだに競争を生ずるのも自然の道理で、なにか珍奇の品を持ち出して他人ひとを驚かせようと企てるようになる。結局は普通の絵馬屋で売っているような絵馬のたぐいでは満足できない事になって、近郷近在の神社などを巡拝しながら珍らしい絵馬をあさつて歩くようになる。元来この絵馬はそれぞれの願主がんぬしが奉納したのだから、他人ひとがみだりに持ち去ることを許されないのであるが、なんとか頼んで内証で貰つて来るものもある。貰つて来るのはまだしもであるが、甚しきは無断で引っぱずして来るものもある。いわゆる蒐集狂で、それがために理非ふんべつの分別を失うようになるのであつた。

丸多の主人多左衛門もやはり其の一人で、今では普通の趣味や道楽を通り越して、絵馬



蒐集に熱狂する人間となつてしまつた。彼は山の手の同好者をあつめて「絵馬の会」というのを組織し、自分がその胆煎きもいりとなつて毎年の春秋二季に大会を催すことにした。大会は山の手の貸席か又は料理茶屋を会場として、会員一同が半季のあいだに蒐集した新奇の絵馬を持ち寄るのである。

ことしの大会は今月の五日、四谷見附そとの或る茶屋で催されたが、そのときに丸多の主人は大きい古い絵馬を持ち出して、同好の人々をおどろかした。それが彼の正雪かの絵馬であつた。この会に集まるほどの者は、いずれも多左衛門に劣らぬ数寄者すきしやであるから、勿論その絵馬を知つていた。そうして、丸多の主人がどうしてそれを手に入れたかを驚き怪しんで、みんな口々にその事情を訊ききたのだが、得意満面の多左衛門は唯にやにやと笑つてゐるばかりで、詳しい説明をあたえなかつた。

そうなるや一種の好奇心も手伝つて、会員の幾人かはその後大宮八幡へ見とどけに行くや、かの絵馬は依然として懸かつてゐるので、人々はまた不思議に思つた。丸多は自分の物のように云つてゐるが、実は神官になんとか頼んで、大会の当日だけひそかに借り出して来たのであろうと想像して、ある者は丸多の宅へ押し掛けて詰問すると、多左衛門は笑いながら彼の絵馬を出して見せたので、その人は又おどろかされた。同じ絵馬が世に二つ

と無い以上、その一つは偽物にせものでなければならぬ。どう考えても、由井正雪の絵馬、殊にその画面も寸分違わぬような同一の絵馬がほかにあろうとは思われないので、更にその出所を根掘り葉掘り詮議すると、多左衛門は声をひそめて話した。

「これはお前さんだけに極内ごくないでお話し申すが、実は八幡様から盗み出して来たのです。しかし由緒ある絵馬が紛失したとあつては、その詮議がやかましいから、偽物をこしらえて掘り換えて置いたのです。高いところに懸けてある絵馬だから、下からうっかり見上げただけでは誰も偽物とは気が付かない。このくらいの苦勞をしなければ、良い物や珍らしい物は容易に手に入らない世の中ですよ」

かれは得意の鼻をうごめかしていた。それを聞かされた人も相当の蒐集狂で、神社の絵馬を無断で引っぱずして来るくらいのは随分やりかねない男であつたので、普通の人ほどには驚きもしなかつたが、それでも偽物をこしらえて掘り換えて来るほどの知恵はなかつたらしく、今さらのように多左衛門の熱心を感嘆して歸つた。

いつの世にも秘密は漏れ易い。お前さんだけにと云った丸多の話は、それからそれへと同好者のあいだに広がって、正雪の絵馬は盗み物であるという噂が立った。

それを早くも聞き込んだのは、四谷坂町さかまちに住むお城坊主牧野逸齋の次男万次郎であった。万次郎も「絵馬の会」に加入している一人で、丸多の主人とはかねて懇意の仲であったが、十日ほど前の夜に尋ねて来て奥の間で多左衛門と何かの密談に時を移して帰った。その以後も殆ど毎日のように尋ねて来る。なんの為にそんなに足近く出入りをするのか、主人は口をつぐんで何事をも語らないのであるが、それが普通の用件や雑談でないことは、多左衛門の暗い顔色を見ても大抵想像されるので、女房や番頭らも心配した。女房のお才は大番頭の与兵衛と相談して、ある夜かの万次郎が帰るあとを尾けさせた。与兵衛は途中の小料理屋へ万次郎を誘い込んで、この頃の密談の内容を訊きただすと、万次郎は眉をひそめてささやいた。

「おまえの店の主人は飛んでもねえことをしてしまった。わたしも絵馬をあつめるのが道楽で、ずいぶん無駄な錢ぜにを使ったり、無駄な暇ひまを潰したりしているが、お前の主人は道楽が強過ぎるぜ。いかに熱心だからといって、和田の八幡から正雪の絵馬を持ち出すとは呆れたものだ。わざわざ偽物にせものをこしらえて、本物と掬り換えて来るなんぞは、あんまり罪

が深過ぎるじゃあねえか。いや、それも普通の絵馬ならば、なんとか内済にする法があるかも知れねえが、正雪の絵馬じゃあ何分にも事が面倒になる。由井正雪が天下の謀叛人だということとは、三つ兎でも知っている筈だ。あんな物をそのままにして置くお上の思召おぼしめしは知らねえが、それに眼をかけて、内証で盗み出して、自分の家に仕舞い込んで置くというのは、上を恐れぬ致し方だと云われても一言もあるめえ。おまえを嚇かすようだが、由井正雪は徳川のお家を亡ぼそうとした謀叛人だ。その謀叛人に心を寄せて、その奉納の絵馬を大事に仕舞って置くなぞとは飛んでもねえ話だ。万一それが露顕したら、公儀に対して不届きな奴だというので、重ければ死罪か遠島、軽くとも追放で家財は没収、何代か続いた丸多の家もお取り潰しになるのは知れたことだ」

それを聞かされて、与兵衛も蒼くなつた。まったく万次郎の云う通り、謀叛人の絵馬などを盗み出して、大事に仕舞って置くことが露顕したあかつきには、どんなお咎めを受けるかも知れない。盗むということがすでに悪いのに、それを盗んだ品が更に悪いのであるから、どうでも無事に済む筈がないと、彼はふるえ上がるほどに驚いたのである。それについて、万次郎は又云つた。

「悪いことは知れ易いもので、この絵馬の一件がもう人の口の端はにのぼっている。このま

ま打つちやつて置いたら、どんなことが出しゅったい来するか判らねえ。私もおまえの主人とは  
 懇意こんいにしているのだから、なんとか無事に納めてやりてえと、このあいだから心配してい  
 るのだ。おまえの主人も今じやあ後悔して、万事よろしく頼むというのだが、なにしろ莫  
 大の金のいる仕事だ。こういうことは一人や二人に金かなぐつわ轡はを嵌めても、ほかの口から発あは  
 き立てられちやあ仕方がねえ。お奉行は別としても、南北の両奉行所に付いている与力同  
 心は三百人もある。一人に十両と廉やすく積もつても、三千両はすぐに消えてしまう。岡つ引  
 だつて顔のいい奴には何とか挨拶をして置かなけりやあならねえ。そんなこんなを併あわせる  
 と、まず四、五千両は要るだろう。勿論、大金には相違ねえが、主人の命も助かり、丸多  
 の店も無事に助かるということを考えれば、高いようで廉いものだ」  
 この事件を揉み消すには、まず岡つ引の口を塞がなければならぬといふので、万次郎  
 は多左衛門から百両ずつの金を二度うけ取った。しかしそんな事で済むわけは無いので、  
 あとの金を早く工面くめんするように迫っているが、多左衛門はなぜか渋っているのだ、とかく  
 に埒が明かないと、彼はやや不満らしく話した。自分も好んでこんな事に係り合いたくは  
 無いのであるから、お前の主人がいつまでも渋っているようならば、自分はもう手を引く  
 のほかは無いと、彼は云った。

それが一種の嚇しのように聞かれなくても無かつたが、今この場合、万次郎にすがつて何とか無事を図つてもらうのが近道であると考えたので、与兵衛は自分が責任を帯びて、その金を調達すると請け合つた。但し旧家といい、老舗しにせといつても、丸多の店の有金ありがねを全部をかき集めても二、三千両に過ぎない。そのほかの財産はみな地所や家作かきくであるから、右から左に金には換えられない。それを抵当にして他よそから金を借り出すか、あるいは親類に相談して一時の立て換えを頼むか、二つに一つの都合を付けるまで猶予してくれと、彼は万次郎に嘆願した。

「それなら先ず有金を吐き出して置いて、地所や家作の抵当はあとの事にすればいいじゃあねえか。こつちは急ぎだ。ぐずぐずしていると、六日むいかの菖蒲あやめになるぜ」と、万次郎は催促するように云つた。

「しかし、有金を残らず差し出してしまひましては、店の商売が出来ません」と、与兵衛はいろいろに云い訳をした。

かれこれ押し問答の末に、ともかくもあしたの晩までに二千両の金を渡すことに約束して、二人は別れた。与兵衛は急いで大木戸の店へ歸つて、まず女房のお才にその一条を訴えると、お才も死人のような顔になつた。すぐに主人の多左衛門を奥へ呼んで、女房と番

頭が右ひだりから詰問すると、多左衛門もいつさいを正直に白状した。自分の道楽からみんなに心配をかけて申し訳がない。諸事は万次郎の云う通りであるから、何分よろしく取り計らつてくれと、彼は面目なげに云った。万次郎に二百両を渡しただけで、なぜあと金を出し渋つていたかという問いに対しては、余りに大金であるからだと答えた。

それはおとといの夜のこと、この上は何をおいても金の工面を急がなければならぬと、女房は再び番頭と打ち合わせの上で、お才は明るる日の早朝から下町したまちの親類へ相談に行つた。与兵衛は淀橋辺にある丸多の地所と家作を抵当にして金を借り出す掛け合いに出かけた。親類の方は相談が纏ひるまらないで午過ぎにお才は悄悄すこすこ々と歸つて来ると、店にも奥にも多左衛門の姿は見えなかつた。裏口からこつそりと出て行つたらしく、店の者も今まで気が付かなかつたというのである。時が時だけに、お才は一種の不安を感じて、居間のそこらを取り調べると、果たして一通の書置が発見された。それはお才に宛てたもので、自分の不心得を詫びた上に、与兵衛と相談して後の事はよろしく頼むと簡単に書いてあつた。

やがて与兵衛も歸つて来て、この書置を見せられて驚いた。取りあえず店の者を諸方へ走らせて心あたりを探させたが、多左衛門の消息は判らなかつた。多左衛門は一体なんの

ために家出したのか。一家の主人たるものが女房や番頭に申し訳なきの家出は、あまり気が狭過ぎるように思われるので、更に家内を取り調べると、かねて貯えてあるたくさんの絵馬のうちで、かの正雪の絵馬一枚が紛失していた。彼がその絵馬をかかえて家出したらしいのは、裏口の井戸ばたに洗濯物をしていた女中の証言によつて推定された。長さ二、三尺の額がくのような物を風呂敷につつんで、小脇にかかえて出てゆく旦那様のうしろ姿を見ましたと、女中は云つた。

女中や番頭らに対して面目ないという意味も多少はまじつていたかも知れないが、多左衛門が家出の真意は、かの絵馬に対する根強い愛惜であることが想像された。万次郎の運動によつて、たとい此の事件が無事に納まるとしても、絵馬を掘り換えたままにして置くことは出来ない。こうなつた以上は、どうしても本物を元へ戻さなければならぬ。それが彼に取つては忍び難い苦痛であるので、結局かれは家を捨て、妻を捨て、さらに我が身をほろぼすをも顧かえりみないで、かの絵馬を抱いて姿を隠したのであらう。つまり一種のマニアである。この時代でも、余り物に凝り過ぎると馬鹿か気違いになると云つたのであるが、多左衛門も絵馬の道楽に凝り過ぎて、殆ど気違いのようになつてしまつたらしい。余りのあさましさに云うべき言葉もなく、お才も与兵衛も顔をみあわせて溜め息のほかは無かつ



た。

その日が暮れると、約束の通りに万次郎が来た。与兵衛は主人の家出の事情を打ち明けて、そのありかの知れるまでは運動費の二千両を渡しかねるから、暫く猶予してくれと懇願すると、万次郎はそれを信じなかった。家内の者が共謀して、主人をどこへか隠したのであろうと彼は邪推した。

「ゆうべも番頭に云つた通り、おれは親切づくで働いているのだ。それ無むにして、変な小細工をするなら、おれはもう手を引くからそう思ってくれ。後日ごにちに何事が起つても、主人の首に縄が付いても、この店が引つくり返つても、決しておれを恨みなさんなよ。こんなことに係り合うのは真つ平御免だ」

さんざんに機嫌を損じたらしい彼は、あらあらしく畳を蹴つて立ち去つた。多左衛門はもちろん帰つて来なかつた。丸多の一家は不安のうちに雷雨の一夜を明かした。

「さて、これからどうしたらいいか」

途方に暮れたお才と与兵衛は更に額ひたいをあつめて相談の末、若い番頭の幸八を奥へ呼んだ。番頭といつても赤の他人ではなく、幸八はお才の遠縁にあたる者で、丸多の夫婦には実子が無いために、行く行くは彼を養子にすることに内定していたのであつた。そういう関係

から、幸八も今度の事件については一生懸命に働かなければならない立ち場に置かれていた。

この場合、何をどうするにしても、まず主人多左衛門のありかを探し出さなければならぬので、知り合いの手先に頼んで内々で探索することになった。去年の暮れ、丸多の手代が懸け金の持ち逃げをした時に、手先の亀吉が調べに来て、与兵衛や幸八らとも顔馴染になっていたので、幸八がその使を云い付かったのである。彼はその日の午後の雷雨を冒して、駕籠を飛ばせて亀吉の家へ頼みに行くと、亀吉も降りこめられて家にいた。しかも幸八から委細の話を聞いて、彼は首をかしげた。

「こりやあなかなか面倒な仕事で、わつし一人の手に負えそうもねえ。主人のありかを探し出したところで、あとの始末がむずかしい。やっぱり親分の知恵を借りなけりやあなるめえ」

彼が幸八を連れて来たのは、こういう訳であった。亀吉の話の足らないところを、幸八が重い口ながら付け加えて、なにぶんお願い申しますと折り入って頼んだ。

二人の説明を聞いてしまって、半七もおなじく首をかしげた。

「成程こりやあ亀吉の云う通り、なかなか面倒な仕事らしい。お城坊主の倅という悪い者

が引つからんでいるので、いよいよ面倒だ。しかしまあ折角のお頼みだから、なんとか考えてみましょう。おかみさんにもあんまり心配しねえように云って置くが好うござんすよ」

「なにぶんお願い申します」

幸八は繰り返して頼んで帰った。

「親分。忙がしいところを済みません。飛んだ厄介物を担ぎ込んで……」と、亀吉は云った。彼は勿論、幸八から相当の働き賃を貰っているに相違なかつた。

「そこで、その偽物の絵馬をこしらえたという家は何処だ」と、半七は訊いた。

「塩町の天津屋だそうです」

「一体その絵馬を掬り換えて来たのは誰だ。丸多の主人が自分でやったのか」

「それがよく判らねえのですが……。おそらく自分が手を下したのじゃありませんか。ほかに頼まれた奴があるのだろうと思われませんがね」

「むむ。いくら道楽が強くつても、大家の主人が自分で手を出しやあしめえ。絵馬屋の奴らが頼まれたのか、それともほかに手伝いがあるのか、それもよく詮議しなけりやあならねえ。神社の絵馬をどうしたの、こうしたのというのは、寺社の支配内のことで、おれたちの係り合いじゃあねえ。殊に堀ノ内の先だと云うのだから、江戸の町方の出る幕じゃ

あねえ。おれ達は頼まれただけの仕事をして、丸多の主人の居所いどころさえ突き当てりやあいのようなものだが、唯それだけじゃあ納まるめえ。仏作ほとけつて魂入れたましいずになるのも残念だから、引き受けた以上はひと通りの事をしてやりてえと思ふのだが……。なにしろその現場を見なけりやあどうにもならねえ。この分じやあ明日あしたは天気だろう。ともかくも一緒に和田へ踏み出してみようじやあねえか。朝の五ツ半（午前九時）までに大木戸へ行つて待ち合わせいてくれ」

「承知しました」

「亀吉は表へ出て、空を仰ぎながら云つた。

「親分。あしたは確かに上天気……。星が降るように出ましたよ」

三

亀吉の予報は狂わないで、明るる二十八日の朝の空はぬぐうように晴れていた。三月末の俄か天気で、やがて衣ころも更えもがという綿入れが重いようにも感じられたが、昔の人は行儀あわせがいい、きょうから裕あわせを着るわけにも行くまいというので、半七は暖か過ぎるのを我慢し

て出ると、神田から山の手へのぼる途中でもう汗ばんで来た。羽織をぬいで肩にかけて大木戸まで行き着くと、亀吉は約束通り待つていた。

「すこし天氣が好過ぎるな。だが、まあ、降られるより優ましだろう」

「そうですよ。きのうのようじやあどうすることも出来ません」と、亀吉も羽織そでを袖ただた置みにしながら云った。

内藤新宿の追おい分わけから角つのはす筈、淀橋を経て、堀ノ内の妙法寺を横に見ながら、二人は和田へ差しかかると、路ばたの遅い桜もきのうの雷雨に残りなく散っていた。

もう青葉だなどと話しながら、畑道のあいだを縫って大宮八幡の門前へ辿り着くまでに、二人は途中の百姓家で幾たびか道を訊いた。

「初めて来たせいかわい、ずいぶん遠いな」と、半七は立ちどまって云った。

「ちつとくたびれましたね。まあ、一服しましょう」

二人は路ばたの石に腰をかけて、煙草入れを取り出した。空はいよいよようやく晴れて、そこらの麦畑むいで雲雀ひばりの声もきこえた。風の無い日で、煙草のけむりの真つ直ぐにあがるのを眺めながら、半七はしずかに云い出した。

「なあ、亀。おれは途中で考えながら来たのだが、ここの絵馬は無事だろうと思うぜ」

「そうでしょか」

「おそらく無事だろうと思う。偽物をこしらえて掬り換えたというが、それは丸多の亭主が欺されているので、実は自分が偽物を掴まされているのだろう」

「成程ね」

「そうなりやあ論はねえ。丸多の亭主は誰にかだまされて、偽物を高く買い込んだというだけのことだ。おれはどうもそうらしく思う。念のためによく調べてみよう」

二人は松並木のあいだを縫って本社の前に出ると、境内は思ったよりも広かった。東にむかった社殿に幾種の絵馬が懸けつらねてあつて、そのうちにかの白鷹の絵馬も見えたので、二人は近寄つて暫く無言で見あげていたが、やがて半七は自分の予覚が適中したようにほほえんだ。

「おれは素しろうと人で、こんな物の眼利きは出来ねえが、彩色いろどりといい、木目もくめといい、どう見ても拵え物じゃあねえらしい。こりやあ確かに本物だ」

神仏混こんごう淆ごうの時代であるから、この八幡の別当所は大宮寺という寺であつた。半七は別当所へ行つて、自分たちの身分を明かして、かの絵馬について聞き合わせると、寺僧らもおどろいて出て来た。彼らは半七の眼の前で、かの絵馬を取りおろして裏表を丁寧にあら

ためだが、絵馬にはなんの異変もなく、当社伝来の物に相違ないと云った。

「いや、よく判りました。わたしも大方そうだろうと思つて居りました」と、半七は云つた。「就いてはもう一つ伺いたいことがあります、近頃ここへ来てこの絵馬の図取りでもしていた者をお見掛けになりませんか」

「成程そう云えば、去年の十月か十一月頃のことでした」と、若い僧の一人が答えた。

「四十前後の町人風の男が二十三四の女と二人連れで参詣に来て、この絵馬の下に暫く立つて眺めていましたが、女は矢立やたてと紙を取り出して何か模写しているようでした。その後、又来しましたが、今度は女ひとりで、やはり一心に写しているように見受けました」

その女の人相や風俗を訊きただして、半七と亀吉は寺僧らに別れた。

「その女というのは絵かきでしようね」と、亀吉は云った。

「むむ。どうで偽物をこしらえるのだから、絵かきも味方に入れなけりやあならねえ。男というのは絵馬屋の亭主で、女は出入りの絵かきだろう。これから帰つたら、その女を探つてみる」

「ようがす。女の絵かきで、年ごろも人相も判っているのだから、すぐに知れましょう。そこで、大津屋はどうします。もう少し打つちやつて置きますか」

「どうで一度は挙げる奴らしいが、まあ、もう少し助けて置け。いよいよおれの鑑定通り、ここの絵馬が無事であるとすれば、大津屋の亭主は丸多をだまして、偽物を押し付けたに相違ねえ。それを知らずに偽物を後<sup>ごしよう</sup>生大事にかかえて、丸多の亭主は何処をうろ付いているのだろう。考えてみると可哀そうでもある。なんとかして早くそのありかを探し出してやりてえものだ」

「帰りに堀ノ内へ廻りますかえ」

「ついでと云つちやあ済まねえが、ここらまでは滅多<sup>めった</sup>に来られねえ。午飯<sup>ひるめし</sup>を食つてお詣りをして行こう」

二人は堀ノ内へまわつて、遅い午飯を信楽<sup>しがらき</sup>で食つて、妙法寺の祖師に参詣した。その帰り路で、半七は又云い出した。

「おれは又、途中で考え付いたが、そのお城坊主の次男……万次郎とかいう奴は、大津屋の亭主とぐるになつているのじやあるめえかな。丸多が絵馬で半氣違いになつているのに付け込んで、大津屋が先ず偽物でいい加減に儲けた上に、今度は万次郎が入れ代つて、謀叛人の絵馬を云いがかりに、丸多を嚇<sup>おそ</sup>しつけて何千両という大仕事を企<sup>たくら</sup>んだのじやあねえかと思うが……。もしそうならば、重々<sup>ふて</sup>太え奴らだ。しかしお城坊主の倅<sup>たぐら</sup>なんぞには随分



悪い奴がある。下手<sup>へた</sup>をやると逆捻<sup>さかね</sup>じを喰<sup>く</sup>うから、気をつけて取りかからなけりやあならねえ」

元来た道を四谷へ引つ返して、大木戸ぎわの丸多の店へ立ち寄ると、主人多左衛門のゆくえは未だ知れないと番頭らは嘆いていた。

幸八を表へ呼び出して、半七はきょうの結果をささやいた。

「まあ、そういうわけだから、絵馬の一件は心配するほどの事はありません。だまされた人間もよくねえが、欺した奴はなお悪いという事になる。そこで、お城坊主の倅<sup>こ</sup>というのは、その後に尋ねて来ませんかえ」

「おとといの晩、怒つて帰つたきりで、きのうも今日も見えません」

「又来て嚇<sup>おど</sup>し文句をならべても、肝腎の絵馬は無事なのだから、別に恐れることはありません。まあいい加減にあしらつて置くがようござんすよ」

「ありがとうございます」と、幸八はやや安心したように云つた。

大木戸から更に塩町へ引つ返して、大津屋の店さきへ来かかった頃には、三月末の長い日ももう暮れかかっていた。うす暗い店には商売物の絵馬が大小取りまぜてたくさんに懸けてあつて、若い職人ひとりと小僧二人が何かの仕事をしているらしかった。半七はその

店へはいつて、要<sup>い</sup>りもしない絵馬を一枚買った。

「親方は内かえ」

「きようは昼間から出ました」と、職人は答えた。

「いつ頃帰るか、判らないかね」

「この頃はちよいちよい出るので、いつ帰るか判りませんが……。なにか御用ですか」

「むむ、奉納の大きい物を頼みてえのだが、親方が留守じゃあ仕方がねえ。また出直して来よう。おかみさんもいねえかね」

「おかみさんは……。四、五年前になくなりました」

「じゃあ、親方は一人かえ。子供は……」

「娘があります」

「娘は幾つだ」

「十八です」

「いい女かえ。おめえは様子がいいから、もう出来ているのじゃあねえか」

「冗談でしょう」と、職人は大きい声で笑い出した。

半七も笑ってそこを出たが、五、六間ほど行き過ぎて大津屋をみかえった。

「おい、亀。少し忙がしくなつて来たが、大津屋の亭主と娘について出来るだけのことを洗つてくれ。万次郎の方は松に云いつけて調べさせろ。丸多の亭主は半氣違げえだから、何処にどうしているか、差しあたりは手の着けようがねえ。それから如才じよさいもあるめえが、大津屋を調べるついでに、女の絵かきの探索も頼むぜ」と、云いかけて半七は急に又笑い出した。「やあ、いけねえ、いけねえ。おれもよつぽど焼きがまわつたな。今あの店で、ここの絵馬をかく人は誰だと訊いてみりやあ好かつたに……。こいつは大しくじりだ」

「なに、そんなことはすぐに判りますよ」

店屋の灯がちらほら紅くなつた往来で、親分と子分は別れた。

#### 四

あくる日は又陰つて、夕方から細かい雨がしとしとと降り出した。どうも続かない天気だと云つてみると、その夜の五ツ（午後八時）過ぎに、亀吉と松吉が顔をそろえて来た。

「丁度そこで逢いました」

「そりゃあ都合が好かつた。そこで、早速だが、めいめいの受け持ちはどうだった」と、

半七は訊きいた。

「じゃあ、わっしから口を切りましょう」と、亀吉は云い出した。

「大津屋の亭主は重兵衛といつて、ことし四十一になるそうです。五年前に女房に死なれて、お絹という娘と二人つきりですが、どつかに内証の女があると見えて、この頃は家を明けることが度々ある。それから、親分。その娘のお絹というのは、お城坊主の次男とどうも可怪おかしいという噂で……。してみると、親分の鑑定通り、万次郎と大津屋とはぐるだろうと思いますね。それから大津屋へ出入りの女絵かきは、孤芳こほうという号を付けている女で、年は二十三四、容貌きりようもまんざらで無く、まだ独身ひとりみで、新宿の閻魔えんまさまのそばに世帯よたいを持つているそうです。そこで、まだはつきりとは判りませんが、この女は大津屋の亭主か万次郎か、どつちかの男に係り合いがあると、わっしは睨にらんでいるのですが……」

「そうかも知れねえ」と、半七はうなずいた。「そこで、松。おめえの調べはどうだ」

「わっしの方はすらすらと判りました」と、松吉は事もなげに答えた。「親分も知つていなさる通り、四谷坂町に住んでいるお城坊主の牧野逸齋、その長男が由太郎、次男が万次郎で……。万次郎はことし二十一ですが、まだ養子さきも見付からねえで、自分の家うちの厄介やくかいになっている。こいつも絵馬道楽のお仲間、大津屋へも出這入りをしてるうちに、

今も亀が云う通り、大津屋の娘と出来合ったらしいという噂です。だが、近所の評判を聞くと、万次郎という奴はもちろん褒められてもいねえが、取り立てて悪くも云われねえ、世間に有りふれた次三男の紋切り型で、道楽肌の若い者というだけの事らしいのです」

「大津屋の重兵衛はどうだ。こいつにも悪い評判はねえか」と、半七は又訊いた。

「そうですね」と、亀吉はすこし考えていた。「これも近所町内の評判は別に悪くもねえようです。万次郎と同じことで、まあ善くも無し、悪くも無しでしょうね。だが、古い店だけにしんしょう身み上じやうは悪くも無いらしく、淀橋の方に二、三軒の家作も持っているそうです」

「娘はどんな女だ」

「きのう親分がいい女かと云ったら、職人が笑っていたでしょう。まったく笑はずで、わつしもきよう初めて覗いてみたが、いやもう、ふた目と見られねえ位で、近所のお岩さまの株を取りそうな女ですよ。可哀そうに、よつぽど重いほうそう瘡そうに祟られたらしい。それでもまあ年頃だから、万次郎と出来合った……。と云つても、おそらく万次郎の方じゃあ次男坊の厄介者だから、大津屋の婿にでもはいり込むつもりで、まあ我慢して係り合っているのでしょうかよ」

「それで先ずひと通りは判った」と、半七は薄くと瞑じていた眼をあいた。「娘と万次郎と

出来ていることは父親の重兵衛も知っていて、行く行くは婿にでもするつもりだろう。それはまあどうでも構わねえが、丸多の亭主の絵馬きちがいにつけ込んで、偽物の絵馬をこしらえて、孤芳という女に絵をかかせて、その偽物を丸多に押しつけて……。それから入れ代つて万次郎が押し掛ける。やっぱり俺の鑑定通りだ……。今の話じゃあ、万次郎という奴はあんまり度胸のある人間でも無さそうだから、おそらく重兵衛の入れ知恵だろう。自分が蔭で糸を引いて、万次郎をうまく操あやつつて、大きい仕事をしようとする……。こいつもなかなかの謀叛人だ。由井正雪が褒めているかも知れねえ。だが、こいつらがおとなしく手を引いて、これつきり丸多へ因縁を付けねえということになれば、まあ大目おおめに見て置くほかはあるめえ。何事もこの後の成り行き次第だ」

「まあ、そうですね」と、亀吉も答えた。

「それにしても、丸多の亭主にも困ったものだ。店の者にやあ気の毒だが、何処をどう探すあてという的あてがねえ」と、半七は溜め息をついていた。

それから世間話に移つて、やがて四ツ（午後十時）に近い頃に、亀吉らは一旦挨拶して表へ出たかと思うと、又あわただしく引つ返して来た。

「親分、飛んだ事になってしまった。丸多が死んだそうですよ」

つづいて番頭の幸八が駈け込んだ。

「いろいろ御心配をかけましたが、主人の死骸が見付かりました」

「どこで見付かりました」と、半七も忙がわしく訊きいた。

「追おい分わけの高札場こうざつばのそばの土手下で……」

「それじゃあ近所ですね」

「はい。店から遠くない所でございます」

「どうして死んでいたのです」

「松の木に首をくくって」

「例の絵馬は……」

「死骸のそばには見あたりませんでした。御承知の通り、あすこには玉川の上水が流れて居りまして、土手のむこうは天竜寺でございませう。その土手下に一本の古い松の木がありますが、主人は自分の帯を大きい枝にかけて……。死骸のそばに紙入れ、煙草入れ、鼻紙などは一つに纏めてありましたが、絵馬は見あたらなかつたと申します。あの辺は往来の少ない所でございませうので、通りがかりの人がそれを見付けたのは、けさの六ツ半頃だそうでございませうが、近所とは申しながら丸多の店とは少し距はなれて居りますので、すぐ

にそれとは判りかねたと見えまして、御検視なども済みまして、その身許みもともようようはつきりして、わたくし共へお呼び出しの参りましたのは、やがて七ツ頃（午後四時）でございます。それに驚いて駆け付けまして、だんだんお調べを受けまして、ひと先ず死骸を引き取つてまいりましたのは、日が暮れてからの事で……。早速おしらせに出る筈でございましたが、何しろごたごた致して居りましたので……」

「そりやあ定めてお取り込みでしょう。どうも飛んだことになりましたね」と、半七は気の毒そうに云つた。

「そこで、御検視はどういうことで済みました」

「乱心と申すことで……。人に殺されたというわけでも無し、自分で首を縊くつたのでございますから、検視のお役人方も別にむずかしい御詮議もなさいませんでした」

「御検視が無事に済めば結構、わたし達が差し出るにやあ及びませんが、ともかくもお悔みながらお店まで参りましょう。おい、亀も松も一緒に行つてくれ」

幸八は駕籠を待たせてあるので、お先へ御免を蒙りますとことわつて帰つた。半七は途中で箱入りの線香を買つて、三人連れで大木戸へむかつた。雨は幸いにやんだが、暗い夜であつた。



「ひよつとすると、丸多の亭主は首くくりじゃあねえ。誰かに縊くられたのかも知れねえな」と、半七はあるきながら云った。

「やつぱり大津屋の奴らでしようか」と、亀吉は小声で訊いた。

「絞め殺して置いて、木の枝へぶら下げて置くというのは、よくある手だ」と、松吉も云った。

「まあ、行つてみたらなんとか見当が付くだろう」と、半七は云った。「もしそうならば、大目に見て置くどころか、あいつらを数珠しゆずつなぎにしなけりやあならねえ。又ひと騒ぎだ」

三人が大木戸の近所まで行き着くと、幸八は店の者に提灯を持たせて迎えに出ていた。

丸多の店にはいつて、半七は持参の線香をそなえて、家内の人たちに悔みの挨拶をした。

今夜は親類に知らせただけで、夜が明けてから世間へ披露ひろうするとの事であつたが、それでも旧ふるい店だけに、出入りの者などが早くも詰めかけて、広い家内は混雑していた。

「御検視の済んだものを、わたくし共がいじくるのもいかがですが……」と、半七は親類や番頭にことわつて、座敷に横たえてある多左衛門の死に顔の覆いを取りのけた。片手に蠟燭をかざしながら、まずその死に顔を覗いて、次にその咽喉のどのあたりを檢あらめた。更にその手の指を一々に檢めた。

それが済んで、半七は縁側の手水鉢ちようずで手を洗っていると、幸八が付いて来てささやくように訊いた。

「別に御不審はございませんか」

「少し御相談がありますから、大番頭さんを呼んでください」

与兵衛と幸八を別間へ呼び込んで、半七は自分の意見を述べた。自分はこれまで縊死者いししやの検視にもしばしば立ち会っているが、わが手で縊くびれて死んだ者があんなに苦悶の表情を留めている例がない。咽喉のどのあたりに微かに搔かき傷の痕がある。左の中指と右の人さし指の爪が少し欠けている。それらを総合して考えると、主人は他人ひとに絞められて、その絞め縄を取りのけようとして藻搔もがきながら死んだのである。自分の帯で縊くれていたと云うが、頸のまわりに残っている痕を見ると、細い縄のような物で強く絞めたらしい。就いては乱心の自殺として、このまま無事に済ませてしまうか、あるいは他殺として其の下手人げしゆにんを探索するか。皆さんの思召おぼしめしをうかがいたいと、半七は云った。

それを聞いて、与兵衛らはひどく驚いたらしく、いまは後家ごけとなつた女房のお才をはじめ、親類一同を奥の間へ呼びあつめて、俄かに評議を開いた。今さら他殺などと騒ぎ立てるのは外聞にもかかわる事であるから、この儘おだやかに済ませたが好かろうという軟派

と、他殺ならば其の下手人を探し出して、相当の仕置を受けさせるが順道であるという硬派と、議論は二派に分かれたが、お才はどうしても主人のかたきを取って貰いたいと強硬に主張するので、軟派の人々も争いかねて、結局その下手人の探索を半七に頼むことになった。

それから二日目に、丸多の店では主人の葬式を出した。表向きは乱心の縊死ということになつていたので、世間の手前、あまり華やかな葬式を営むことを遠慮したのであるが、それでも会葬者はなかなか多かつた。大津屋の重兵衛も会葬者の一人に加わつていた。

葬式が果てた後、亀吉は重兵衛のあとを尾<sup>つ</sup>けてゆくと、彼は太宗寺の方角へ足を向けた。それは新宿の閻魔として有名な寺である。その寺に近いところに、小さい二階家があつて、重兵衛はその入口の木戸をあけてはいつた。庭には白い辛夷<sup>こぶし</sup>の花が咲いていた。

近所で訊くと、それが彼の女絵師の孤芳の住み家であつた。これで重兵衛と孤芳との關係が、自分の鑑定通りであるらしいことを亀吉は確かめたが、更に近所の者の話を聞くと、孤芳の家には重兵衛のほかに、二十歳前後の色白の男が時々に入出入りする。又そのほか十七八の不器量な娘も忍んで来るといふのであつた。男はおそらく牧野万次郎で、娘は大津屋のお絹であろう。孤芳が重兵衛の困い者のようになつてゐる關係上、万次郎とお絹

はここの二階を逢いびきの場所に借りている。それも有りそうな事だと、亀吉は思った。その報告を聴いて、半七は云った。

「それだけの事が判つたら、それを手がかりに、もうひと足踏ん込まなけりやあいけねえ。丸多の亭主の下手人は大津屋の重兵衛と睨んでいるものの、確かな証拠も無しに手を着けるわけにやあ行かねえから、まあ気を長く見張っている」

亀吉は承知して帰つたが、それから十日ほど後に、かの孤芳は太宗寺のそばを立ち退いてしまつたと報告した。女絵師は突然に世帯しよたいをたたんで、夜逃げ同様に姿をかくしたので、近所でもその引越し先を知らないと言うのであつた。

それから更に十日ほどの後に、亀吉は新しい報告を持つて来た。大津屋の娘お絹が家出してゆくえ不明になつたが、万次郎と一緒に駆け落ちなどをした様子はない。万次郎は相変らず四谷坂町の実家に住んでいる。大津屋では娘の家出を秘密にして、病氣保養のために房州の親類に預けたとか云っているが、それが突然の家出であることは近所でもみな知っていると云うのである。女絵師の夜逃げ、娘の家出、そのあいだに何かの糸が繋がっているらしいのは、何人なんびとにも容易に想像されることで、半七もそれに就いていろいろの判断を試みたが、確かにこうという断定をくだし得ないうちに、四月もいつか過ぎてしま

った。

五

「あの時は実におどろきましたよ。胆きもを冷やしたというのは、全くこの事です」

半七老人はその当時の光景を思いぼう浮かべたように、大きい溜め息をついた。それに釣つり込まれて、わたしも思わず身を固くした。

「何事がおこったんです」

「まあ、お聴きください。毎度お話をする通り、嘉永六年の黒船渡来から、世の中はだんだんに騒さわがしくなつて、幕府でも海防ということに注意する。なんどき外国と戦争を始めるかも知れないというので、江戸近在の目黒、淀橋、板橋、そのほか数力所に火薬製造所をこしらえて、盛んに大筒小筒の鉄砲玉を製造したんです。それには水すい車しやが要るということで、大抵は大きい水車のある所をえら択んだようですが、今から考えれば火薬の取り扱あい方に馴なれていなかっただけでしょう、それが時々ときに爆発して大騒さわぎをする事がありました」

「あなたもその爆発に出逢あつたんですか」

「そうですよ。わたくしの出逢ったのは淀橋でした。御承知の通り、ここは青梅街道の入口で、新宿の追分から角筈、柏木、成子、淀橋という道順になるんですが、昔もなかなか賑やかな土地で、近在の江戸と云われた位でした。淀橋は長さ十間ほどの橋で、橋のそばに大きい穀物問屋がありまして、主人は代々久兵衛と名乗っていたそうですが、その久兵衛の店に精米用の大きい水車が仕掛けてありました。この水車を山城やましろの淀川の水車にたとえて、淀橋という名が出来たのだという説もありますが、嘘か本当か存じません。ともかくも大きい水車があるために、この家も火薬製造所に宛あてられていました。ところが、このお話の安政元年、六月十一日の明け六ツ過ぎに突然爆発しました。炎天つづきで焔硝が乾き過ぎたせいだとも云い、何かの粗相で火薬に火が移ったのだとも云い、その原因ははっきり判りませんが、なにしろ凄まじい音をさせて、三度もつづいて爆発したんです。さながら天地震動という勢いで、久兵衛の家は勿論、その近所二丁四方は家屋も土蔵も物置も、みんな吹き飛ばされて滅茶滅茶になってしまいました。全体では四丁四方の損害でした。いくら賑やかだと云つても、それは表通りだけのことで、裏へまわれれば田や畑が多いんですから、その割合いに人家の被害は少なかったんですが、死人や怪我人は随分ありました。それが為に虫をおこして死んだ子供や、流産した女もあつたそうです。いや、

実に大変な騒ぎで……。誰だつて不意をくらつたんですが、わたくし共は捕物の最中というのだから猶更おどろきましたよ」

「なんの捕物に出ていたんですか」

「それが今お話をしている絵馬の一件で、大津屋の重兵衛を追い廻している時なんです」と、老人は説明した。

「いや、まあ、捕物の前にこの一件の種明かしをしましてしましましょう。それで無いと、お話がどうも<sup>はかど</sup>捗りませんから……。大抵はもうお判りでしょうが、丸多の主人多左衛門が絵馬道楽で、半気ちがいになつてゐるのを付け込んで、大津屋の重兵衛は正雪の絵馬の偽<sup>に</sup>物をこしらえました。そうして、本物と掬り換える役目まで引き受けたんですが、掬り換えたというのは嘘で、実は偽物をそのまま丸多へ渡したんです。鷹の絵は女絵かきの孤芳にかかせましたが、その絵といい、絵馬の<sup>きじ</sup>木地といい、よつぽど上手に出来ていたと見えて、丸多も見ごとに一杯食わされてしまつたんです。早くいえば、骨董好きの金持が書画屋や道具屋に偽物売り付けられたようなわけで、それで済んでいればまあ無事なんです。重兵衛はその骨折り賃に三十両という金を取つていながら、まだ其の上に大きい慾をかいいて、謀叛人の絵馬をぬすみ出したとか、謀叛人の絵馬を大事にしているとかいうの

を種に、丸多を嚇かして何千両をゆすり取ろうという大望たいもうをおこして、その手先に万次郎を使うことになりました」

「万次郎は大津屋の娘と本当に關係があつたんですか」

「確かに關係がありました。いわゆる悪女の深なさけで、女の方はもう夢中になつていたんです。親父の重兵衛も勿論承知で、ゆくゆくは夫婦めおとにすると云つていたくらいですから、万次郎も今度の役を引き受けなければなりませんでした。万次郎は年も若いし、腹のしつかりした悪党というのでもありませんが、つまりは慾に引つかかつて、重兵衛の指尺さしがね通りに働くことになつたんです。そこで、丸多の主人をうまく嚇し付けて、最初に百両ずつ二度も引き出したんですが、重兵衛はそのくらいの事で満足するのじゃあない、どうしても何千両の夢が醒めないのです、いろいろに万次郎をけしかけて、ますます丸多いじめにかかつていると、相手の多左衛門は絵馬をかかえて家出をしてしまったので、この計画は腰折れの形になりました。それでも丸多の女房や番頭を嚇かせば、まだ幾らかになると思っているうちに、重兵衛は心にもない人殺しをする事になつたんです」

「重兵衛が丸多の主人を殺したんですね」

「多左衛門が家出をしてから三日目、即ち三月二十八日の晩に、重兵衛は淀橋にある自分



の家作を見まわりに行つて、それから千駄ヶ谷の又助という建具屋へ寄つて、雨戸一枚と障子二枚をあつらえて、夜もやがて四ツ（午後十時）という頃に、提灯をぶら下げて、例の高札場に近い土手へさしかかると、大きい松の木の下にぼんやり突つ立っている人影が見える。もしや首でも縊くるのかと、提灯を袖に隠しながら抜き足をして近寄ると、それが丸多の主人であつたので、おどろいて声をかけました。

なにしろ相手の多左衛門が姿を隠してしまつては、万事の掛け合いが巧く行かないと思つている矢さきへ、丁度にここでその姿を見付けたので、重兵衛はこれ幸いと喜んで、いろいろに宥なだめすかして丸多の店へ連れて帰ろうとしたが、多左衛門はどうしても承知しない。家へ帰ると、これを取り返されるから否いやだと云つて後ご生しょう大事に例の絵馬を抱きえている始末。まったく、本人は半氣違じいになつていたらしく、いかに説得しても肯きかないので、重兵衛もしまいには焦じれ込んで、腕うでずくで引き摺ずつて行こうとする、相手は行くまいと立ち去ろうとする。それを又ひき留めて、二人はどうとう組あ討ちになつて……。土手下に転がって争あううちに、そこに細い藁わら繩づなが落ちていたので、重兵衛は半分夢中でその繩を拾つて、相手の頸のどにまき付けて……。と、本人はこう白状しているんですが、恐らく嘘うそじゃあ

なかつたと思ひます。多左衛門を殺しては金の蔓が切れてしまふ道理ですから、重兵衛も好んで相手を殺すはずはなく、ほんの一時の出来心に相違ありません。

しかし相手を殺した以上、なんとか後始末をしなければなりませんから、重兵衛は死人の帯を解いて松の木にかけて、自分で縊くびれたようにこしらえて、早々にそこを立ち去つたんです。偽物の絵馬を残して置いて、なにかの詮議の種になると面倒だと思つたので、風呂敷包みのまま引つ抱えて歸つて、叩き毀こわして焼き捨てたそうです。その風呂敷も一緒に焼いてしまえば好かつたんですが、そこが人情の吝けちなところで、風呂敷まで焼くにも及ぶまいと、そのまま残して置いたのが運の尽きでした」

「そうすると、その風呂敷から露頭したんですか」

「まあ、お聴きなさい。だんだんにお話し申します」

老人はひと息ついて、また話し出した。

「それから孤芳という女絵かきのお話ですが、これは親兄弟もない独り者で、絵筆を持たば相当の腕もあるんですが、どこの師匠に就いて修業したというでもなく、まあ独学のよきな訳であるので、自然世間に認められる機会がなく、絵馬の絵などを書いて世渡りをしているうちに、いつか重兵衛の世話になるようになって、新宿の太宗寺のそばに世帯を持

つて、まあ困い者といったような形になっていたんです。その縁故で、大津屋の娘のお絹と万次郎も、孤芳の家の二階を逢いびきの場所に借りていた……。と、そこ迄は好かったです。そのうちに孤芳と万次郎が妙な関係になってしまいました。孤芳は二十四、万次郎は二十一、男の方が年下であるだけに、女の熱度はだんだんに高くなる。それがお絹の眼についたから堪まりません。すぐに親父に訴えると、重兵衛もおどろいて眼を光らせる。重兵衛と万次郎と、孤芳とお絹と、この四人が引つからんで、ひどく面倒なことになりました。

万次郎が丸多を嚇かして取った二百両は、あとで総勘定をするという約束で、ひと先ず重兵衛が預かっていたんですが、丸多の主人が死んだ後にも、四の五の云つて一文も出しません。万次郎も業を煮やして、たびたびうるさく催促しても、重兵衛は鼻であしらつていて相手にしません。そればかりでなく、万次郎を婿にするなどという話も立ち消えになつてしまいました。重兵衛として見れば、自分の妾を盗むような奴に、娘をやつたり金をやつたりする気にはなれなかつたでしょう。まだ其の上に、万次郎を遠ざける為に、だしぬけに孤芳をせき立てて、夜逃げ同様に新宿を立ち退かせて、淀橋の街はずれに引越させました。そこには大津屋の家作が二軒あつて、その一軒は空家あきやになつていたんです。

重兵衛が千駄ヶ谷の建具屋に雨戸や障子を頼んだのも、孤芳をここへ引つ越させる下拵えであつたと見えます。

勿論、孤芳の引つ越し先は、万次郎にもお絹にも秘かくしていたんですが、いつまで知れずに済むはずがありません。それから十日も経たないうちに、二人ともにもう探り出してしまいました。それが又、一つの事件を惹き起こすもとで……」

## 六

半七老人の話は終らない。わたしも最後まで聴きはすまいと耳を澄ましていると、老人は床の間の置時計をふと見かえつて、女中部屋の老婢ばあやを呼んだ。老婢が顔を出すと、老人はなにか眼で知らせた。すぐに呑み込んでゆく老婢のうしろ姿を見送つて、これは悪かつたと私は俄かに気がついた。老人は午飯ひるめしの用意を命じたに相違ない。早朝から長座ちようざして、午飯まで御馳走になつては相済まないと、わたしは慌てて巻煙草の袋を袂へ押し込んで、帰り支度に取りかかろうとするのを、老人は手をあげて制した。

「まあ、お待ちなさい。お話はもう少しですよ」

云ううちに、老婢はもう裏口から足ばやに出て行つたらしい。追えども及ばずと観念して、私はずうずうしく坐り直すと、老人は又話しつづけた。

「四月二十一日の宵に、お絹は近所の湯屋へ行く振りをして、塩町の天津屋をぬけ出して、淀橋の孤芳の家へ尋ねて行きました。孤芳が万次郎を引つ張り込んでいるだろうと疑つて、その様子を窺いに行つたんです。自分の家作ですから勝手はよく知っているので、裏口から廻つて窺うと、案の通り、男と女は縁側に近いところへ出て、早い蚊いぶしを焚きながら、睦まじそうに話している。それを見ると、お絹は嚇かっとのぼせて、悪女が更に鬼女のようになつて、その台所にあり合わせた出刃庖丁をとつて、孤芳を殺そうとして暴れ込んだので、孤芳はおどろいて庭へ飛び降りる。それを追おうとするお絹を万次郎が抱きとめる。お絹は死に物狂いになつて暴れ廻る。その刃物をもぎ取ろうとするうちに、思わずも手がまわつて……。と、いうことになつてはいるんですが、これは重兵衛の場合と違つてどうだか判りません。金は貰えず、婿にはなれず、こんな悪女に付きまとわれては遣り切れなと思つて、万次郎が思い切つてずぶりとやったのかも知れません。いずれにしても、お絹は乳の下を突かれて即死。惚れた男の手にかかつて果敢はかなくなりました。その死骸は万次郎と孤芳が始末して、縁の下へ埋めているところへ、又そのあとから重兵衛がたずね

て来たんです。

もう隠すことは出来ないのです、万次郎も度胸を据えて、正直にその事情を打ち明けた上で、おれを下手人として突き出してくれと云うと、重兵衛も考えたらしいんです。わが子を殺されて驚いたには相違ないが、自分にも絵馬の秘密があるので、それを万次郎にしゃべられても困る。もう一つには、丸多の主人を殺した一件を万次郎も孤芳もうすうす覚っているかも知れないという弱味があるので、お絹殺しを表沙汰にするのは危い<sup>あぶな</sup>。そこで、三人が相談の末に、お絹は房州の親類へ預けたとか、あるいは家出したとか云い触らして、この一件は闇に葬ってしまうことにする。その代りに、万次郎は二百両の割りまえを一文も貰わず、孤芳とも今夜かぎりに手を切るということになりました。万次郎に取っては割の悪い約束ですが、仮りにも女ひとりをして殺して、それを内分にして貰うというのですから、そのくらいの事は仕方がありません。そんなわけで、お絹の死骸を寺へ送ることは出来ないのです、親父の重兵衛も手伝って、やはり床下に埋めることになりましたが、幸いに近所の者には覺られずに済んだのです」

「お絹は可哀そうでしたね」

「刃物などを振り廻したのは悪いに相違ないが、こうなると可哀そうなもので、それでま

あ一旦は納まったんですが、五月の末頃になると、重兵衛が下谷の方から古着屋を呼んで来て、娘の夏冬の着物を相当に取りまとめて売ったということを、亀吉がふと聞き出して、その日の暮らしに困るといっても無いのに、年ごろの娘の着物をむやみに売り放すのはおかしい。してみると、房州の親類に預けたなどというのは嘘で、娘は死んだか、家出して帰らないか、二つに一つに相違ないと鑑定したんです。

そのほかに又こういうことがありました。丸多の店の菩提寺は中野にあるので、五月二十八日の命日に、女房のお才が番頭の幸八と小僧を連れて、多左衛門の墓まいりに行った。帰り道に、淀橋の町はずれを通ると、その頃のここらには茅葺きの家がたくさんありました。その茅葺きの一軒の家で、庭の梅の実を落としている。垣根は低い四目垣よつめでしたから、通りがかりながら見るとも無しに覗いてみると、梅の実を取っているのは二十三四の女で、それに不思議はないのですが、その時お才と幸八の眼についたのは、梅の木から木へ竹竿をわたして洗濯物を干してある。その洗濯物のなかに一枚の大きい風呂敷が懸かっている。それが見おぼえのある丸多の店の風呂敷で、主人が家出のときに例の絵馬を包んで持ち出したものらしい。丸多の暖簾のれんは丸の中に多の字を出してあるんですが、これには丸多の店のしるしが無く、家の定紋じょうもんの下り藤さがが小さく染め出してある。その風呂敷がどうして

この家に干してあるのかと、二人は不思議に思いながら帰って来て、幸八はすぐに亀吉のところへ知らせに行きました。その家は天津屋の家作で、この頃は女絵かきの孤芳が引越して来ていることを、亀吉ももう承知していましたから、さてこそ案の通りというので、これもすぐにわたくしの所へ注進に来ました。

ところが、あいにく私も幸次郎も、ほかの事件にかかり合っていて、ちよいと手放すことが出来ない。殊にこの一件は重兵衛と万次郎と孤芳とが絡んでいますから、迂濶に一人を引き挙げると、ほかの関係者が散ってしまう虞おそれがあるので、亀吉ひとりに任せるわけにも行かず、ただ油断なく見張らせて置いて、十日ほどくうも空に過ごしてしまいました。そのあいだに亀吉は又こんなことを聞き出しました。千駄ヶ谷の建具屋の又助が重兵衛の註文をうけて、淀橋の家作に雨戸を入れたところ、その建て付けが悪いというので、五月のはじめに直しに行ったが、なんだか畳や縁側に血の痕のようなものが薄く残っていたという。そこで亀吉は、ひよつとするとお絹がここで殺されたのでは無いかと鑑定しました。わたくしもそう思いました。

そのうちに、一方の事件も片付きましたので、いよいよこっちへ手を着けることになりました。六月十日の夜、重兵衛が淀橋へ泊まりに行ったのを突きとめて、わたくしと亀吉



が出かけました。幸次郎も行こうというので、それほどの大捕物でもないが、まあ一緒に連れて行くと、前にお話し申したように大騒動に出つくわして……。いや、もう、ひどい目に逢ったんです」

「火薬の爆発は朝でしょう」

「それが十一日の朝まで引つかかったので……。わたくし共が淀橋へ行き着いたのは十日の夜四ツ半（午後十一時）頃、寝込みへ踏ん込んで一度に押え付けようと思つたんです。ところが、いざ踏ん込んでみると、蚊帳の一方の釣り手はずして、孤芳ひとりが寢床の上にしよんぼりと坐っているんです。重兵衛はどうしたと詮議すると、最初は来ていないとシラを切っていました、しよせんは女ですからとうとう正直に云いました。そこで、だんだんに取り調べると、孤芳は万次郎と手を切ると約束して置きながら、その後もやはり内証で男を引き入れていると、重兵衛もそれを感付いたのでしよう、今夜わたくし共よりひと足さきへ踏ん込んで来て、一つ蚊帳のなかに寝ていた孤芳と万次郎を取り押えました。重兵衛は定めて烈火のごとくに怒るかと思いのほか、うわべは静かに落ち着いて、ここでは話が出来ないから兎も角もそこまで一緒に来てくれと云って、万次郎を表へ連れ出しました。それはたつた今のことだと云うので、孤芳の番人を亀吉に云いつけて、わたくしと

幸次郎は近所へ見まわりに出ましたが、今夜は雨あま催もよいの暗い晩で、そこらに二人のすがたは見付からない。よんどころ無しに又引つ返して来て、再び孤芳を調べると、下り藤さがの紋の風呂敷は引つ越しのときに重兵衛が持つて来たもので、そのまま自分の家で使つていと云つて、現物を出して見せましたが、縁側や畳に血のあとが残っていることは、なんにも知らない、自分は血の痕とは気が付かず、なにかの汚れだと思つていたと、強情に云い張っているんです。

まさかに引っぱたくわけにも行かないので、孤芳の詮議はそのままにして、亀吉と幸次郎を裏と表に張り込ませて、重兵衛や万次郎の帰るのを気長に待つていました。夏の夜は短いから早く明ける。夜が明ければ、二人は何処からか帰つて来るだろう。万次郎を表へ連れ出したのは、孤芳の前では話しにくい事があるからで、まさか殺すほどの事もあるまいと多寡をくくつて、まあ頑張つていたわけです。そういうことには馴れているので、さのみ待ちくたびれるという程でもありませんでしたが、藪蚊の多いには恐れいりました。今と違つて、むかしは蚊が多いので、こういう時にはいつでも難儀します。

そのうちに、そこらの家の鶏が啼いて、夜もだんだんに白らんで来ました。明け方から空模様がよくなつたので、七ツ半（午前五時）には、すっかり明るくなりましたが、二人

はまだ帰つて来ません。亀吉は焦れて、もう一度探しに出ようかと云つているところへ、重兵衛がぼんやり帰つて来たので、亀吉と幸次郎が取り囲んですぐに家内へ引つ張り込みました。万次郎はどうしたかと訊くと、途中で喧嘩をして別れたと云う。おまえは今まで何処にどうしていたかと訊くと、狐に化かされて夜通し迷い歩いていと云う。さてはこいつ、万次郎を殺して空そらとほ呆ぼけているのだらうと思ひましたから、わたくしも嚴重に詮議を始めましたが、やはり同じようなことを繰り返していて埒が明かない。そこで、万次郎のことは二の次にして、丸多の絵馬の一件の詮議にとりかかると、丸多の主人に頼まれて偽物をこしらえたに相違ないが、本物と掬り換える約束をした覚えはないと云うんです。それから証拠の風呂敷を突きつけて、だしぬけにお前は丸多の主人をころしたなと云うと、重兵衛は俄かに顔の色を変えました。さあ、その途端に凄まじい響きと共に、大地がぐらぐらと激しく揺れて、この茅葺きの屋根の家が忽ち傾いたには驚きました。

逃げるという考えもありません。ただ跳ね飛ばされたように庭先へ転げ落ちると、なんだか知らないが砂けむりのような物が一面に舞つて来て、近所の家は大抵倒れたり、傾いたりしている。一体どうしたのだらう、大地震か旋風つむじかと、みんなが顔を見合わせていると、その隙をみて重兵衛は表へ飛び出しました。表の垣根は倒れてしまつたんですから、

自由に往来へ出られます。こいつを逃がしてはならないと思って、わたくしも続いて追つて出る、亀吉も幸次郎も追つて出る。その途端に、激しい揺れが再びどんと来て、わたくし共は投げ出されたように倒れました。つづいてがらがらという音がする。火の粉が飛ぶ……。さては火薬が破裂したのだろうと気がついて、半分這い起きながら窺うと、ここらは火元から距はなれているので、まだ小難の方らしく、水車に近いところの人家はみんな何処へか吹き飛ばされてしまったにはぞつとしました。

重兵衛はどうしたかを見ると、これも一旦は倒れながら、また這い起きて逃げようとする。この野郎と云つて追いかけたんですが、二度の爆発で何処から飛んで来たのか、往来のまん中に屋根が落ちていいるやら、大木が倒れていいるやら、いろいろの邪魔物が道を塞いでいるので、なかなか思うようには駆け出せません。重兵衛は裏手の田圃の方へ逃げるので、わたくしも根こんかぎりに追つて行くと、そのあいだに重兵衛はいろいろの物につまずいて転びました。わたくしも幾たびか転びました。いや、もう、お話になりません。それでもどうにか追いついて、うしろから重兵衛の左の腕をつかむと、その途端に三度目の爆発……。その時はいつさい夢中でしたが、あとで聞くと三度目が一番ひどかったのだと云います。こうなると敵も味方もありません。二人は抱き合ったままで田のなかに転げ込んで

しまいました。これでまあ重兵衛を取り押えたわけですが、こんな危険な捕物は初めてで、時間から云えば僅かの間ですが、馬鹿に疲れたような気がしましたよ」

「そうでしょうね」と、わたしもうなずいた。「そこで亀吉や幸次郎という人達は どうしました」

「わたくしは運よく無事でしたが、二人は怪我をしましたよ。何か飛んで来て撃たれたんですね。亀吉は軽い疵でしたが、幸次郎は右の肩を強く撃たれて、それからひと月あまり寝込みました。ほかにも死人や怪我人がたくさんあったんですから、まあ命拾いをしたと云つてもいいでしょう。孤芳の家も三度目の爆発で吹き倒されました」

「孤芳は無事でしたか」

「さあ、それが不思議で……。孤芳は無事に逃げたのか、どこへか吹き飛ばされたのか、ゆくえが知れなくなりました。万次郎の死骸は川のなかで発見されました。それも重兵衛に突き落とされたのか、夜が明けてぼんやり帰つて来たところを吹き飛ばされたのか、確かなことは判りません。ほかにも死骸が浮いていましたから、あるいは爆発のために吹き落とされたのかも知れません。お絹の死骸は床下に埋めてありました。まあ、お話は大概ここらで切り上げましょう。いや、どうも御退屈で……」

その話の終るのを待っていたように、老婢は膳を運び出して来て、わたしの前に鰻めしが置かれた。

# 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（四）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年8月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：Tomoko. I

2000年3月10日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

正雪の絵馬

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>